

イチゴ新品種
「みおしずく（滋賀 SB 2 号）」
栽培管理指針
Ver.2



令和5年（2023年）4月

滋賀県農業技術振興センター

目次

内容

1. 「みおしずく（滋賀S B 2号）」の由来	1
2. 形態的、生理的特徴	2
(1) 植物体・果実の形態特性	2
(2) 培養液濃度・給液量に対する生長反応	2
3. 栽培管理方法	3
(1) A：育成元株の注文	3
(2) B：親株増殖期	5
① 育成元株の定植	5
② 育成元株定植後の給液管理	6
③ ランナーの管理と苗受け	6
④ 増殖株数の目安	7
⑤ 苗の灌水管理	7
⑥ 子苗(親株)を充実させるための管理	8
(3) C：苗増殖期	9
① 親株の定植	10
② 苗生産中の育苗ハウスの環境管理	11
③ 親株の管理	12
④ ランナーの伸長と苗受け	13

⑤ 苗の灌水・肥培および葉数管理.....	14
⑥ 花芽分化の確認と定植時期の目安.....	15
(4) D：本圃への定植と定植後の栽培管理.....	16
① 苗の定植準備と定植.....	16
② 定植後の灌水・肥培管理.....	17
③ 葉数および芽立て管理.....	18
④ 頂花房出蕾期のマルチングとハチの導入.....	19
⑤ 摘花の方法.....	20
⑥ 栽培期間中のハウス内温度管理.....	20
(5) E：栽培の終了および培地消毒.....	24
① 培地の除塩.....	24
② 培地の消毒.....	24
4. 果実の収穫.....	25
5. 「みおしずく」の栽培にあたる誓約事項.....	27

1. 「みおしずく（滋賀SB2号）」の由来

「みおしずく(品種名:「滋賀SB2号」)」は、平成28年に「かおり野」を母本、「章姫」を父本として交配し、得られた約1,600系統から5年をかけて選抜した品種である(図1)。これまで滋賀県では、他府県や民間の育種家によって育成されたイチゴ品種を作付けしてきたが、生産者から独自品種を求める声が多く出されたことから、連続で出蕾すること、果実が硬いこと、および食味が安定して優れることをコンセプトとして選抜した。

令和3年10月1日付で「滋賀SB2号」として品種登録出願(出願番号35750)を行った。広く一般に愛称を募集したところ、7,607件もの応募があり、その中から「みおしずく」が愛称として選ばれた(令和4年3月22日決定)。

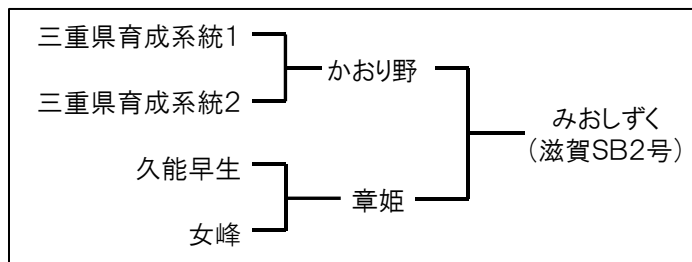


図1 「みおしずく」の系譜

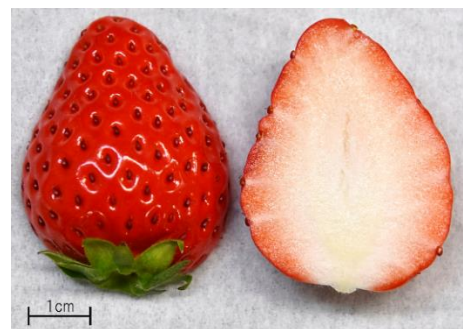


図2 「みおしずく」の果実とその断面

2. 形態的、生理的特徴

(1) 植物体・果実の形態特性

「みおしずく」の草姿は立性で、「章姫」よりも葉が大きく、草丈が高くなりやすい。

表1 特性概要 (2018～2019年度 滋賀農技セ)

	みおしずく	章姫
草姿	立性	立性
花弁色	白	白
果実の形 [※]	円錐	円錐
果皮色 [※]	橙赤	赤
果肉色 [※]	橙赤	淡赤
季性	一季成り	一季成り

※頂果房第2果・第3果で調査

果皮色および果肉色は橙赤色であり、「章姫」と異なった特徴を持っている(図

2、表1)。また、収穫期間全般を通して「章姫」よりも糖度・硬度が高く、果実品質も高く保持しやすい(表2)。

表2 「みおしずく」と「章姫」の果実品質(2019年度 滋賀農技セ)

栽培施設 ¹⁾	品種	糖度 ²⁾ (%)	酸度 ³⁾ (%)	糖酸比 ³⁾	硬度 ⁴⁾
ハウスA	みおしずく	14.2	0.62	17.1	0.67
	章姫	12.7	0.47	20.8	0.64
ハウスB	みおしずく	12.2	0.63	16.7	0.64
	章姫	11.0	0.48	19.9	0.60

1)ハウスA:7.4m×18mの鉄骨フィルムハウス、ハウスB:6m×17.5mのパイプハウスで調査期間は収穫開始～4月末まで

2)非破壊糖度計で測定 3)破壊糖酸度計で測定 4)単位:kg/直径5mmプランジャー

(2) 培養液濃度・給液量に対する生長反応

「みおしずく」は「章姫」よりも養水分の要求量が多く、施肥量・吸水量が不足すると出蕾の遅れや収量の低下につながる(表3)。出蕾や収量を安定させるためには、「かおり野」と同程度の高めの培養液濃度で管理する必要がある。

表3 異なる培養液濃度で栽培した「みおしずく」の収量と出蕾時期(2019年度 滋賀農技セ)

試験区	培養液濃度(dS/m) ¹⁾		可販収量 ²⁾		50%出蕾日		
	頂花房 出蕾期～	頂花房 収穫開始 ～	株あたり (g/株)	面積当たり (kg/10a)	頂花房	一次 腋花房	二次 腋花房
「かおり野」同等管理	0.8	0.8	506	3,542	10/15	12/5	2/3
「章姫」同等管理	0.5	0.6	422	2,954	11/25	1/10	2/21

1) いずれの区も定植後～頂花房出蕾期は0.4dS/m、3月以降は0.5dS/mで管理

2) 調査期間は11～4月末までとし、栽植密度7,000株/10aとして算出

3. 栽培管理方法

栽培管理方法の概要

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
前年									A: 注文		P.3	
定植年			B: 親株増殖期				P.5					
						C: 苗増殖期				P.9		
翌年			D: 本圃栽培期				P.16					
								E: 消毒		P.24		

(1) A：育成元株の注文

親株種苗を生産するための育成元株(図3)は、滋賀県農業技術振興センターで3月上旬頃に有償配布することとしており、前年秋頃に注文を受け付けるので事前に予約する必要がある。

育成元株 1 株からは、およそ 130~140 株の本圃用苗を増殖できる(図 4)。苗が不足するリスクを下げるため、定植予定株数の 1.2 倍程度確保できることを目標に、育成元株を購入する。



図 3 3月に供給する苗の例

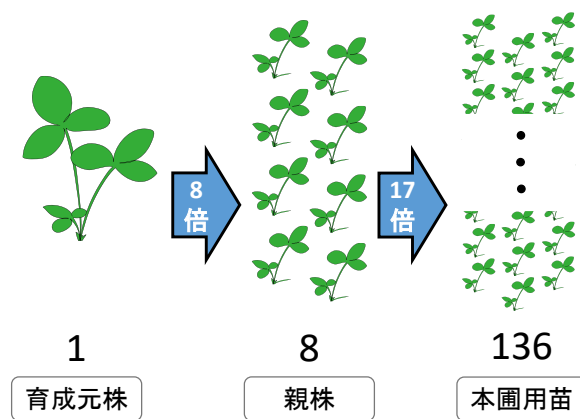
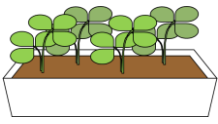



図 4 育成元株 1 株からの増殖株数の目安

(2) B : 親株増殖期

B 親株増殖期		3月			4月			5月			6月			
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
ハウス		◆ランナーが伸びる ⇒30%程度の遮光をかける									30%遮光			
育成元株  株間40cm 2条千鳥植	給液	EC: 0.4dS/m 1~4回 × 5~8分/日									給液量は「章姫」の1.5倍が目安!			
	管理	★ 定植						◆必要苗数が確保できた ⇒余分なランナーを摘除する *子苗をつないでいるランナーは切らない			◆子苗の根鉢ができた ⇒育成元株を 剪定 し 採光をよくする			
子苗 (親株)  7.5cmポリポット		灌水	一度の灌水で根鉢全体がしっかりと湿るよう灌水時間を調節する			水のみ 1~2回/日			★ 定植					
		管理	◆必要苗数確保+根鉢ができた ⇒子苗にB化成1~2個を置き肥えし、子苗の充実を図る						置肥			6月中旬までに!		

* 培養液の EC 値について

本資料の EC 値は原水に EC 0.16dS/m の水道水を用い、培養液資材として OK-F-1 を使う場合の値を表記している。原水の EC 値が異なる場合や、培養液資材にタンクミックス F & B を用いる場合は、別紙を参考に EC 値を調節する。

① 育成元株の定植

入手した育成元株は、市販の育苗用培土を充填した栽培ベッドへ直ちに定植する。長さ 75cm 程度のプランターでは 1 鉢当たり 4 株を、長さ 60cm 程度のプランターでは同 3 株を千鳥状に定植する(図 5)。

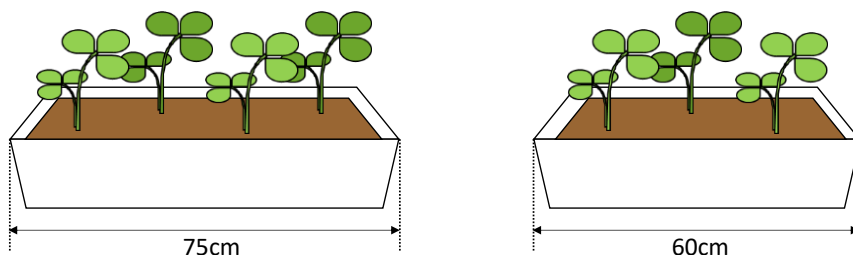


図 5 育成元株の定植イメージ

② 育成元株定植後の給液管理

定植後は直ちに蓮口等で手灌水して培地を十分湿らせるとともに、定植翌日から培養液を給液する。給液する培養液濃度は EC0.4dS/m 程度（OK-F-1 で約 4,000 倍希釈）とし、生育状況、天候や培地の乾燥状態に応じて 1 日あたり 1～4 回、1 回あたり 5～8 分間(一回当たり 100m L/株)を目安に給液する(図 6)。

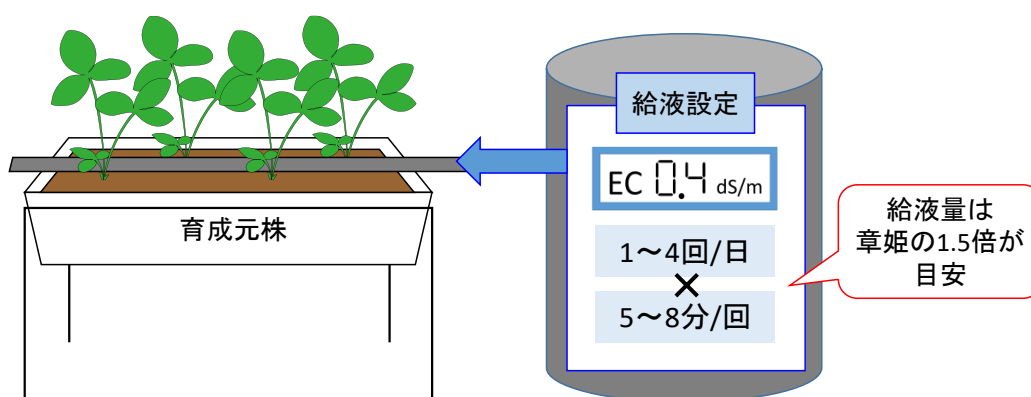


図 6 親株の給液管理

「みおしずく」は「章姫」と比較して多くの養水分を要求する特性があるため、特に生長が進む時期は給液不足にならないよう、「章姫」の 1.5 倍程度（1 回の給液量または一日の給液回数）多めの設定で給液する必要がある。

③ ランナーの管理と苗受け

育成元株の充実を図るため、4 月上旬頃までは抽出するランナーをすべて摘除するとともに、花房が発生した場合は小さいうちに除去する。4 月上旬以降は育成元株から抽出するランナーを適宜苗受けする。充実した親株種苗を確保するため、採苗には 7.5cm ポリポットを使用するとともに、必要数の子苗(親株)が確保

できた後は不要なランナーや子株を摘除する。

④ 増殖株数の目安

育成元株 1 株から採苗する子苗(親株)は 8 株を目安とする(図 7)。その理由は、できる限り早い段階で子苗(親株)を確保することで、6 月の定植までに親株の充実を図るためである。

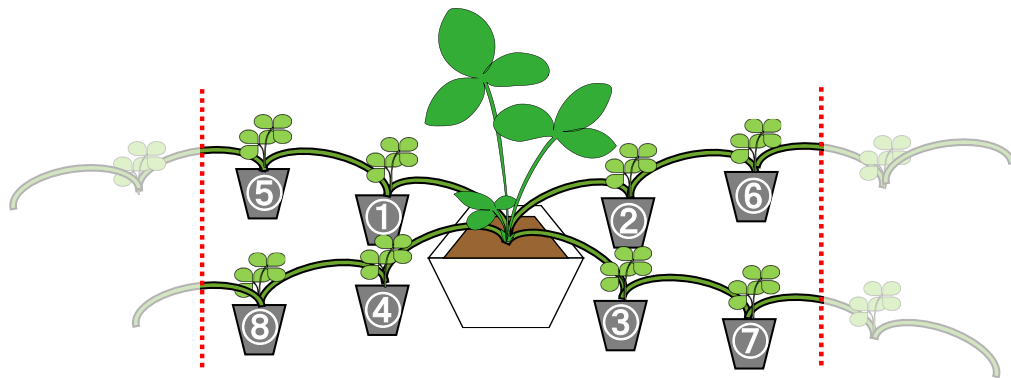


図 7 子苗(親株)の苗受け方法

⑤ 苗の灌水管理

子苗(親株)の底面給水床への灌水は 1 回/日を基本とし、一度の灌水で培地全体が湿る(図 8 A)ように灌水時間を調節する。灌水時間が不十分だと吸水ムラが残る(図 8 B)。灌水時刻は午前 8 時頃とし、その後の灌水は天候や根鉢の乾燥程度によって調整する。夜間に培地が過湿状態(図 8 D)では根腐れの原因になるため、過乾燥でない限り 15 時以降は灌水しない。

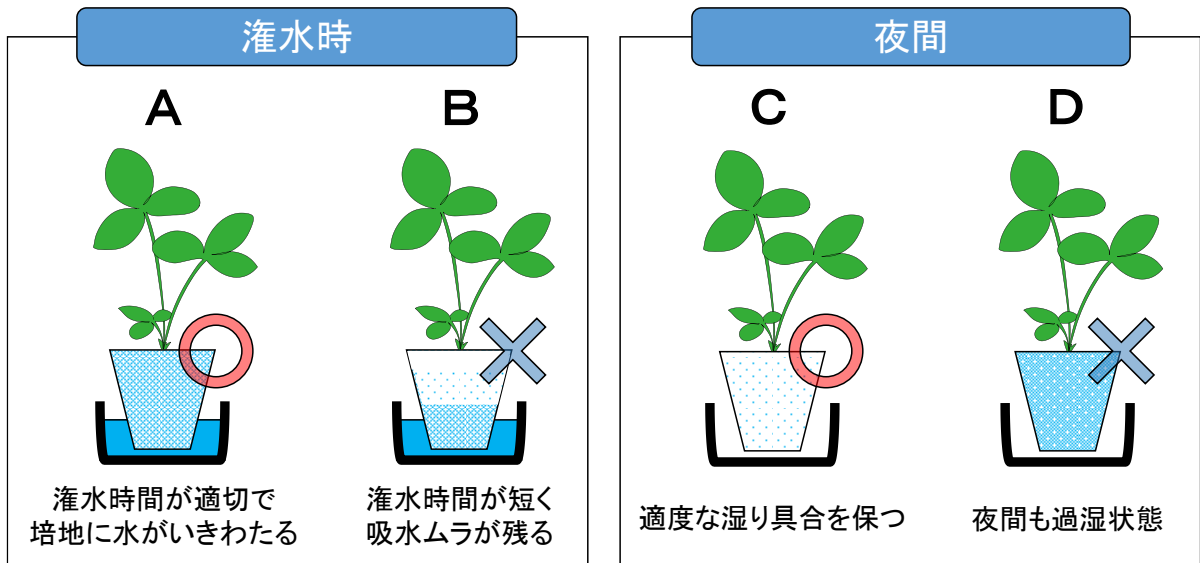


図8 子苗(親株)の灌水管理

⑥ 子苗(親株)を充実させるための管理

5月中旬頃、必要苗数が採苗でき、その根がポット内に回ったら(図9)、さらなる充実を図るため、育成元株を剪葉し採光性を良くするほか、子苗(親株)のポットへIB化成を1~2個程度置き肥

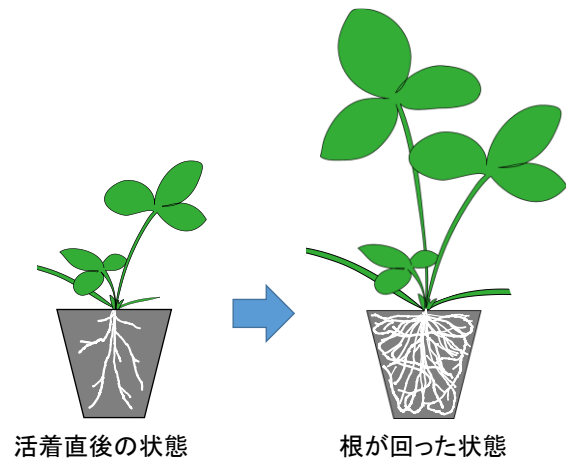


図9 苗の根鉢形成

する(図10)。この時、つながったランナーを切らないように注意する。

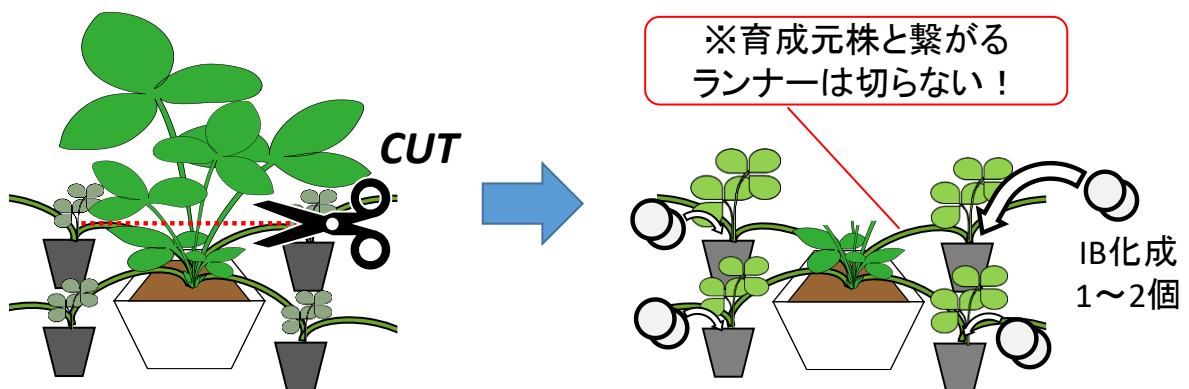
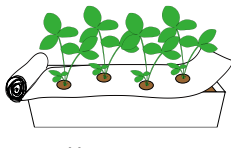



図10 育成元株の剪葉と子苗(親株)への置き肥方法

4月下旬以降、高温が続いてランナー等の日焼けが懸念される場合は、必要に応じて遮光率30%程度の遮光ネットで育苗ハウスを被覆する。

(3) C : 苗増殖期

C 苗増殖期		6月			7月			8月			9月		
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
ハウス管理		常に換気											
		天候によって開始時期を変える											
		50%遮光											
親株  株間40cm 2条千鳥植 +マルチ	給液	EC: 0.4dS/m 1~4回 × 5~10分/日 給液量は「草姫」の1.5倍が目安!											
	管理	★ 定植 ◆必要苗数が確保できた ⇒余分なランナーを摘除する *子苗をつないでいるランナーは切らない ◆子苗の根鉢ができた ⇒親株を 剪葉 し 採光・通風を良くする cut ◆親株の葉が子苗を隠す ⇒子苗を隠している葉をとるかマイカ線等で起こす ◆親株の葉が子苗を隠す ⇒子苗を隠している葉をとるかマイカ線等で起こす ◆親株の葉が子苗を隠す ⇒子苗を隠している葉をとるかマイカ線等で起こす											
子苗 (本圃用苗)  7.5cmポリポット	灌水	水のみ 1~2回/日 一度の灌水で根鉢全体がしっかりと湿るよう時間を調節する											
	管理	◆苗が込み合う ⇒大きい苗から葉をとる ◆苗が込み合う ⇒大きい苗から葉をとる 盛夏期にうどんこ病菌は弱るため、この時の防除が特に発病リスクを下げる効果が高い うどんこ集中防除 直前防除 ◆定植の2週間以上前に苗を切り離す場合 ⇒苗にIB化成を1~2個置き肥えし、苗の充実を図る 株切離し ★ 定植											

① 親株の定植

夏の高温によりランナー発生が少なくなり、本圃に定植する苗が不足することを避けるため、高温期を迎える前に親株を充実させておく必要がある。したがって、遅くとも6月15日頃までには親株を定植する。親株一株あたり17株程度採苗できる(図11)ことから、親株は必要苗数の17分の1を目安とする。

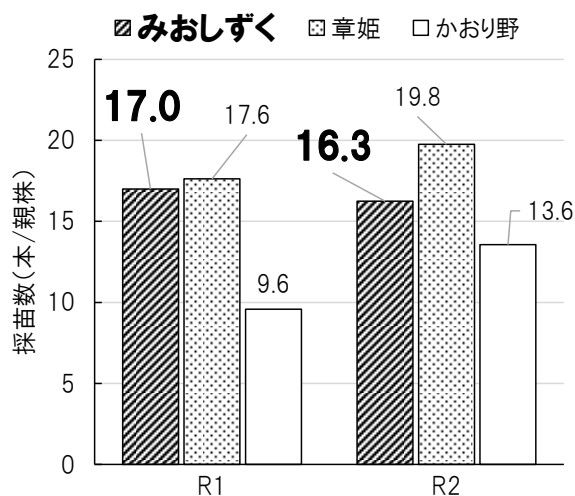


図11 「みおしずく」採苗数の他品種との比較

※「章姫」と同程度、「かおり野」より多く、一株当たり17株程度採苗できる。

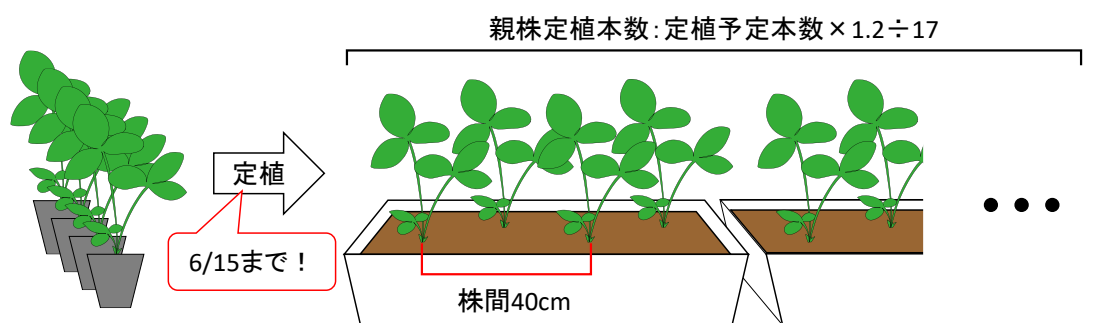


図12 親株定植の概要

定植床には市販の育苗用培土を用い、プランターまたは培地耕用のベッドに、株間40cm程度の2条千鳥状に植え付ける(図12)。ランナーの焼け防止や高温障害を避けるため、親株床にはタイベックマルチまたは白黒マルチを白い面

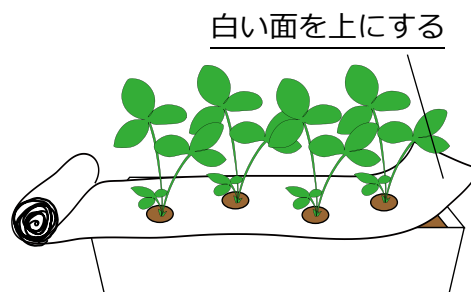


図13 マルチ張りの例

定植後にマルチを張る場合は株のある位置を破って株を通し入れる

を上にして敷設する (図 13)。

② 苗生産中の育苗ハウスの環境管理

親株定植後は常にハウスを開放し、積極的な換気により高温・過湿の抑制に努める。梅雨明け後から 8 月末ごろまでは日射が特に強く高温になる時期であることから、遮光率 50%の遮光資材でハウスを被覆し、昼夜問わず換気するなどできる限りの高温対策を実施する。

遮光はハウス内部から覆う内部遮光より、ハウスを外から覆う外部遮光の方が遮熱効果は高い(図 14)。特に高温が問題になる場合は外部遮光を優先する。

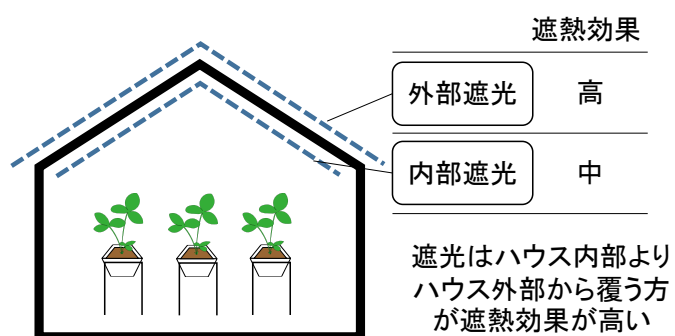


図 14 遮光の方法と効果の違い

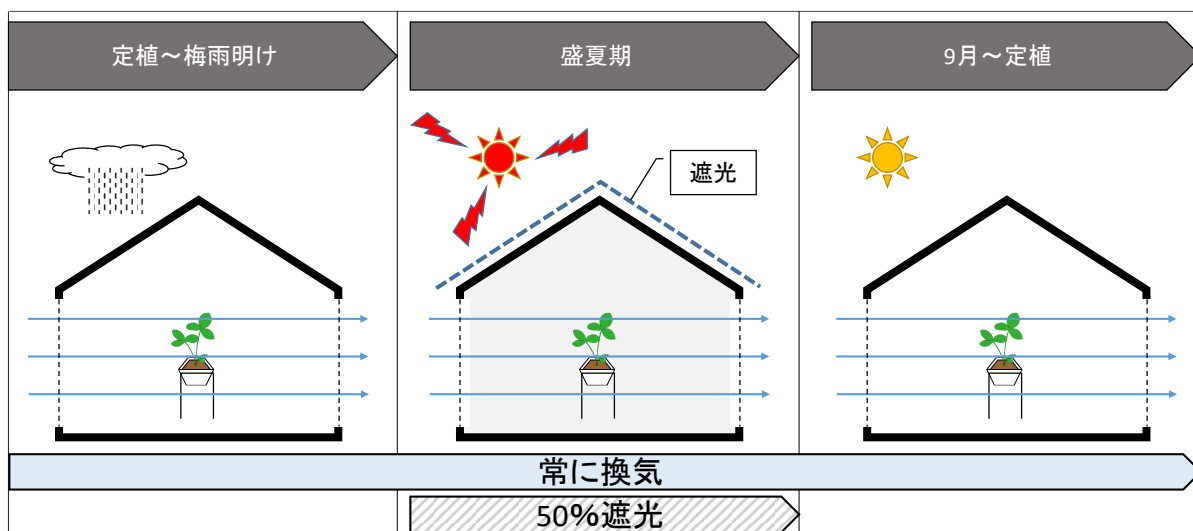


図 15 育苗中のハウス内環境の管理方法

梅雨明け前や、盛夏期を過ぎてからも遮光を続けると、苗の徒長や定植後の活着不良につながるため、必要以上に長期間の遮光は行わない(図 15)。

③ 親株の管理

「みおしずく」は「章姫」と比べて多くの養水分を必要とする。定植後は直ちに EC0.4dS/m (OK-F-1 で約 4,000 倍希釈) の培養液を給液する。給液回数や給液時間は生育状況や天候に応じて 1 日あたり 1～4 回、1 回あたり 5～10 分間を目安とする。

「みおしずく」は吸肥量が多いことから、育苗中に微量元素欠乏症状が現れることがある。新葉が薄くなるなどの要素欠乏が発生すると、ランナーの伸長や子苗(本圃用苗)の生育が著しく悪くなる。そのため、**症状の有無に関わらず**、週に一度、OAT ハウス 5 号等の微量元素資材を親株 100 株当たり 5g 程度、**直接給液タンクに溶か**しいれる(図 16)。

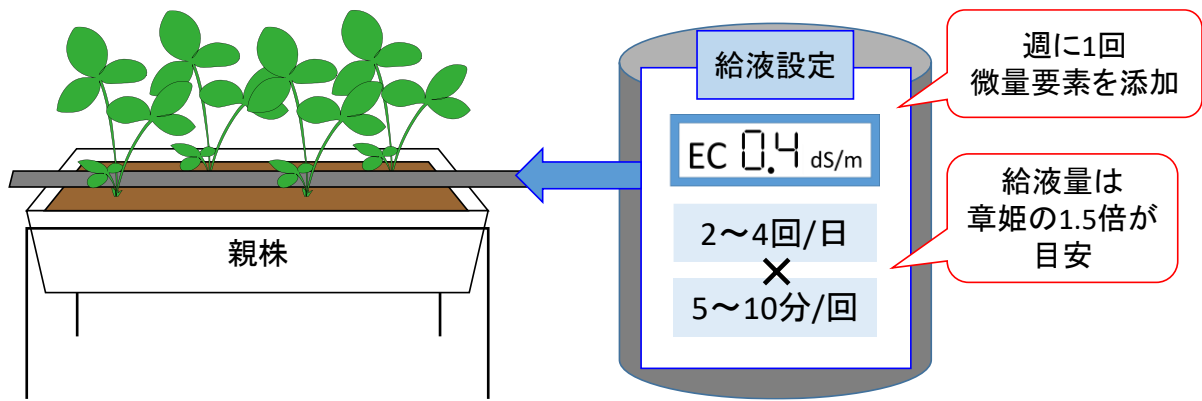


図 16 親株床への給液濃度と給液時間および給液回数

定植後から初期生育の時期は梅雨時期の曇天と重なることが多いため、定植後は常にハウスの換気を図るなどして湿度の低下と高温の抑制に努める。

親株の葉で子苗(本圃用苗)が影になる場合は、影響を与えている親株の葉を除去する。また、必要な苗数が確保できた後は親株を剪葉し採光性をよくする(図 17)。

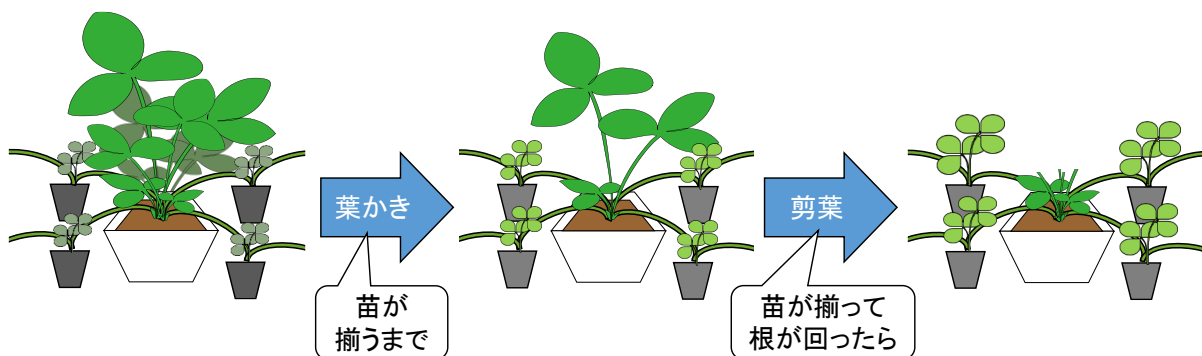


図 17 親株の葉数管理の方法

④ ランナーの伸長と苗受け

親株 1 株から採苗できる子苗(本圃用苗)は 17 株を目安として計算する。採苗数は必要苗数の 1.2 倍を目安とし、余裕を見て苗を確保しておく。目標とする苗数が採苗できたら、それ以降に発生するランナーをすべて摘除し、子苗(本圃用苗)の充実

を図る。

⑤ 子苗(本圃用苗)の灌水・肥培および葉数管理

子苗(本圃用苗)の底面給水床への灌水は1～2回/日を基本とするが、根鉢の湿り具合に応じて増減させる。底面給水育苗の場合、子苗(本圃用苗)の根鉢を完全に乾燥させてしまうと根鉢が吸水しにくくなるため注意する。1回目の灌水時刻は午前8時頃とし、その後の灌水は天候や根鉢の乾燥具合によって調整する。ただし夜間に培地が過剰に湿っていると、根腐れの原因になるため、過乾燥でない限り15時以降の灌水は避ける(p.8 図8)。

苗同士が込み合う場合は、早く受けた苗から順(太郎苗→次郎苗…)に、葉かきを行い、通風・採光性を良くする(図18)。苗への施肥は花芽分化を遅らせる可能性があるため、通常は必要ない。ただし、苗の葉色が薄い場合や、定植の2週間以上前に親株から切り離す場合は、窒素飢餓により定植後に生育不良や活着不良・芯止まりを起こす可能性があるため、IB化成を1～2個ポットに置く。

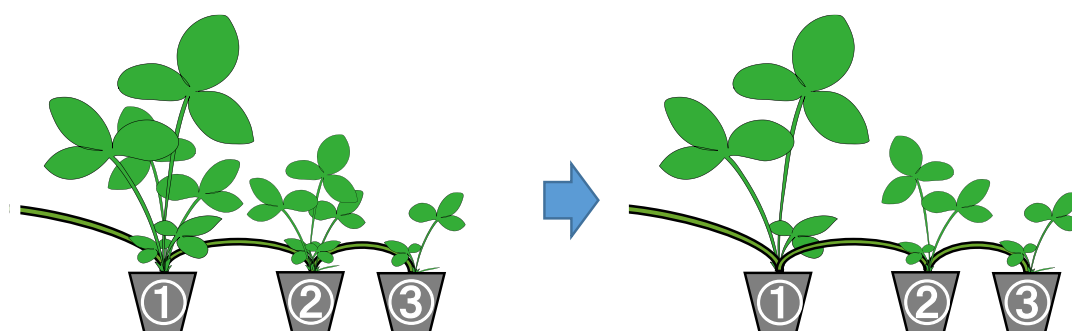


図18 子苗(本圃用苗)の葉数管理方法

①太郎苗 ②次郎苗 ③三郎苗

⑥ 花芽分化の確認と定植時期の目安

花芽分化後～9 月末の定植であれば、出蕾時期や収量が大きく変わることはないが、花芽分化前に定植すると二次腋花房以降の出蕾が遅れ、収量が低下することがある(図 19)。花芽分化直後を狙った時期の定植にこだわらず、確実に花芽分化したタイミングで定植する(表 4)。

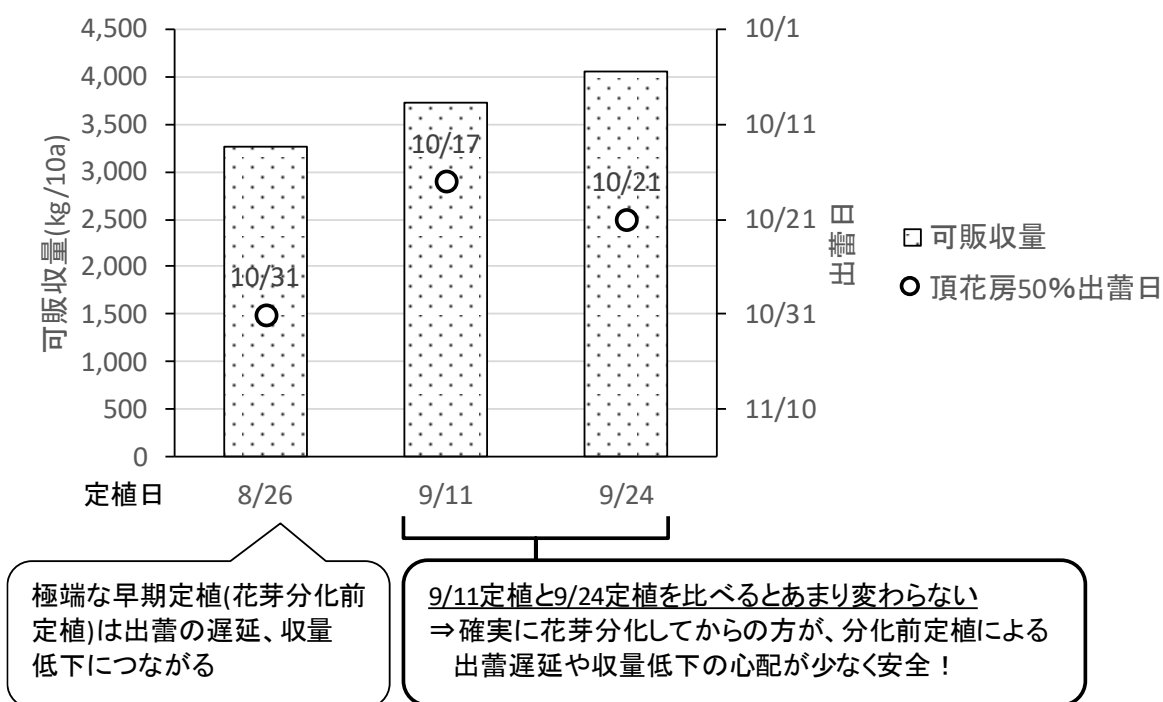


図 19 定植日と出蕾・収量の関係

表 4 定植時期が「みおしずく」の出蕾および収量に及ぼす影響 (2019 年度)

定植日	頂花房	一次腋花房	二次腋花房	収穫開始日	可販収量 (g/株)
8/26(花芽分化前) ¹⁾	10/31	12/10	2/6	11/5	466
9/11(花芽分化後) ²⁾	10/17	12/10	1/21	11/5	532
9/24(花芽分化後) ²⁾	10/21	12/10	1/24	11/8	579

1) 花芽分化までは水のみを灌水し、花芽分化後から培養液の給液を開始した

2) 定植直後から培養液の給液を開始した

D：本圃への定植と定植後の栽培管理

D	9月		10月		11月		12月		1月		2月		3月		4月		5月		6月			
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中		
ハウス	常に換気						保温開始		保温						換気開始		常に換気					
	目標温度		昼 30℃以下		夜 20℃以下		25℃		25～28℃						25℃以下		25℃以下		30℃以下		20℃以下	
給液	EC		0.4		0.8		0.5		0		* ECの単位はds/m											
	回数		1～3回		1～2回						2～5回				0							
株管理	苗の切り離し		★ 定植		葉 6～7枚		黄化した古葉のみ除去						5～6枚									
	芽		一芽		一芽または二芽																	
	果房		摘果(8果/果房)																			
主要時期・作業	早すぎると一次腋花房が遅れる！		◆50%出蕾 ⇒ 培養液濃度を上げる		マルチ張り		頂花房出蕾		ハチ導入		開花はじめ		収穫開始		草勢回復始め		◆草勢が回復し始めた ⇒ 保温から積極的な換気に切り替える					

① 本圃用苗の定植準備と定植

ハダニやハスモンヨトウ等の害虫を本圃へ持ち込まないため、定植5～7日前に薬剤防除を行う。また、定植予定の本圃ハウスはあらかじめ遮光ネットを展張しておく。

定植3日前から前日を目安にベッドへ灌水し、培地を十分に湿らせておく。過度に湿っていると定植作業に支障をきたすので、定植当日はベッドへの灌水はしない。定植前日の夕方は、あらかじめ苗に十分灌水しておく。

定植は株間23cm、2条千鳥植え(約7,000株/10a)とし、通路側へ花房が伸びるようクラウンを通路側へ少し傾けて植え付ける。定植時は苗の根鉢とベッド培地に

隙間ができないよう土を根鉢になじませる(図 20)。

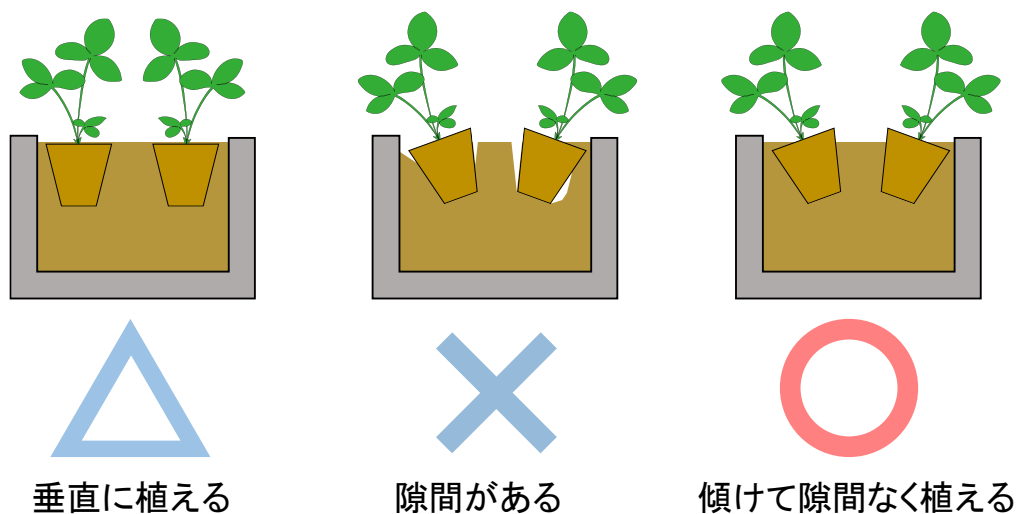


図 20 定植方法

② 定植後の灌水・肥培管理

定植直後に培地全体が十分湿るように灌水する。**定植の翌日から**、表 5 を基準として培養液管理を行う。

表 5 定植後の培養液管理

時期	養液濃度 (dS/m)	灌水回数 (回/日)
定植～頂花房出蕾	0.4	1～2
頂花房出蕾～3月中旬	0.8	1
3月中旬～	0.5	3～5

頂花房が 50%程度出蕾した時点で EC を 0.8dS/m に上げる。 EC を上げるタイミングが遅れると、出蕾の遅れや収量の低下を招く。反対に早すぎると一次腋花房の花芽分化が不安定になることから、出蕾程度をしっかりと観察して適期に EC を上げる。

【養液管理の調節方法】

- ・一回の給液時間で、ベッド長 1m あたり 800～1000cc 程度給液できるようチューブの種類に合わせて時間を設定する。

・ 排水の濃度が給液の濃度より高い場合は、給液の EC 値を 0.1dS/m 下げる。

排水の

EC 値が給液の EC 値と同程度になれば給液の EC 値をもとに戻す。

③ 葉数および芽立て管理

定植後は生育の促進を図るため、新葉が数枚展開するまでは葉かきを行わない。

葉数が増加してきたら、展開葉 6～7 枚を目安に古葉を摘除する。厳寒期は生葉数 7 枚程度を目安とし、黄変した古葉のみ摘除する程度にとどめる。

地際近くのクラウンや葉腋から発生する脇芽は全て摘除し、1 芽仕立てとする。

花房直下から 2 芽が同程度の強さで出てくる場合は、無理に芽かきをせず 2 芽仕立てとする(図 21)。2 芽仕立ては 1 芽仕立てと比較して果数が増える一方、一果重が低下することに留意する(図 22)。

早春以降は、草勢が旺盛で草丈が高くなりやすく、果梗も長くなりやすい。そのため、葉数は 5～6 枚程度になるよう葉かきし、草勢を抑えることで過繁茂を抑制し、果梗の伸びを抑える。



図 21 1 芽仕立て(左)と 2 芽仕立て(右)の株元の様子

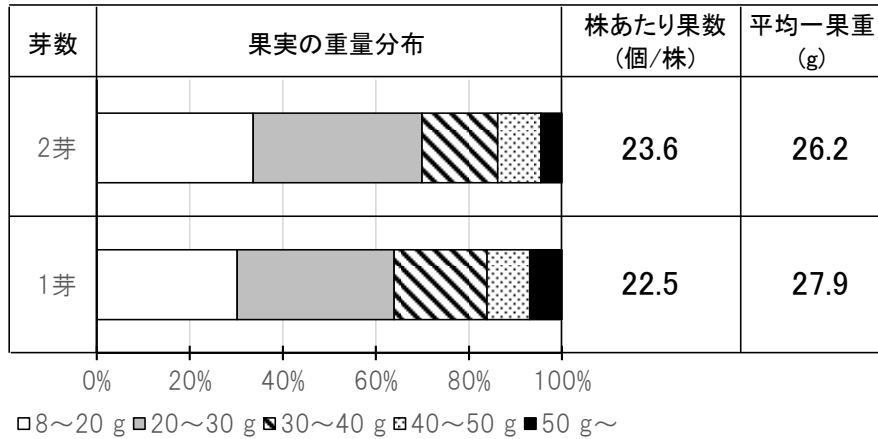


図 22 「みおしずく」の仕立て芽数別の果実重量分布と株あたり果数（2021 年度）

④ 頂花房出蕾期のマルチングとハチの導入

10月中旬ごろ、**出蕾を確認し始めた**
ら(図 23)黒マルチを張る。マルチ張りが早すぎると地温が上昇し、一次腋花房の花芽分化が不安定になる。また、頂花房が伸長してからのマルチ張りは作業時に花や果梗を傷つける恐れがあるため、花房の伸長程度をみながらマルチの敷設時期を調整する。

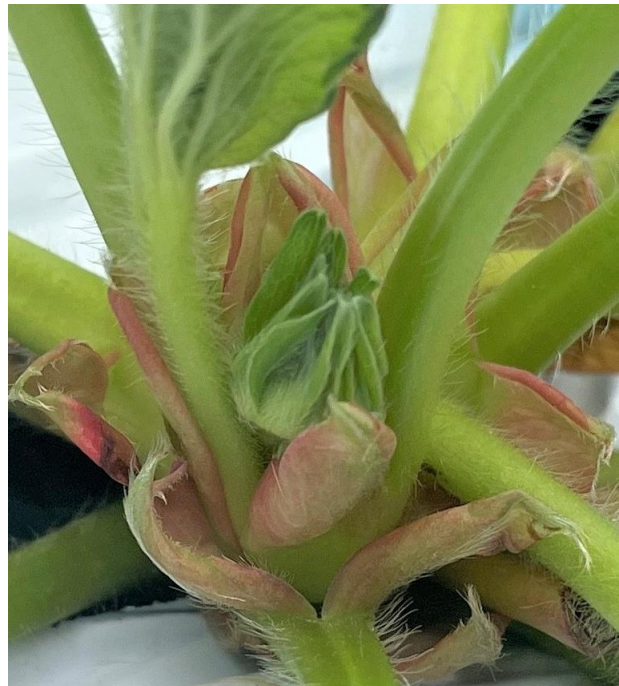


図 23 出蕾はじめ

出蕾から約2週間後、開花はじめごろにミツバチをハウス1棟当たり1群導入する。

⑤ 摘花の方法

「章姫」と比較すると果房あたりの花数が少ない(8~12 花程度)ため、1芽で管理する場合は基本的に摘花する必要はない。2芽で管理する場合は、無摘花で収穫し続けると着果負担による株疲れにつながるため、草勢や着果負担を考慮して摘花により果数を制限する。

⑥ 栽培期間中のハウス内温度管理

下記を参考にハウス内温度管理を行う。

表6 時期別温度管理の目安

時期		9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
項目番号		①		②	③			④	⑤		
管理 (換気設定目安)		換気 (25℃)		保温 (28℃)	保温 (28℃)			換気 (22℃)	換気 (20℃)		
目標 温度	昼温	30℃以下		25℃	25~28℃			25℃以下	30℃以下		
	夜温	20℃以下		5℃以上	5℃以上			5~10℃	10℃以下		

① 定植後から開花までの管理(図 24)

高温による障害やしおれを避け、花芽分化の安定を図るため、可能な限り気温を低く保つための換気に努める。活着までにハウス内が 35℃以上になる場合は遮光等により高温対策を行う。

活着後もハウスを全開にし、日中の高温を抑える。夜温も高いと一次腋花房の分化の遅れや徒長につながるため、夜間もハウスを全開にしておく。

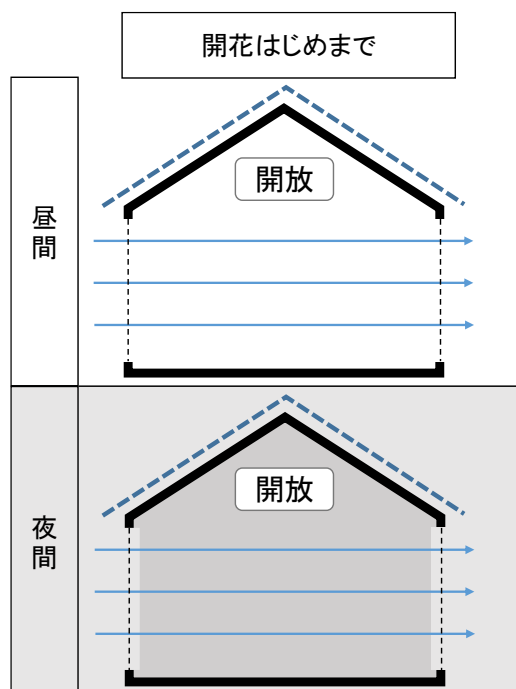


図 24 定植～開花のハウス管理

② 開花から頂果房収穫までの管理(図 25)

夜温が 12℃以下になるまでは、終日ハウスを全開にしておく。夜温が 12℃以下になれば、夜間のみハウスを閉め切り、保温を開始する。それでも 12℃以下になれば内張カーテンも閉める。日中は日射を取り入れるため、内張カーテンは開放し、28℃を目安に換気を行う。

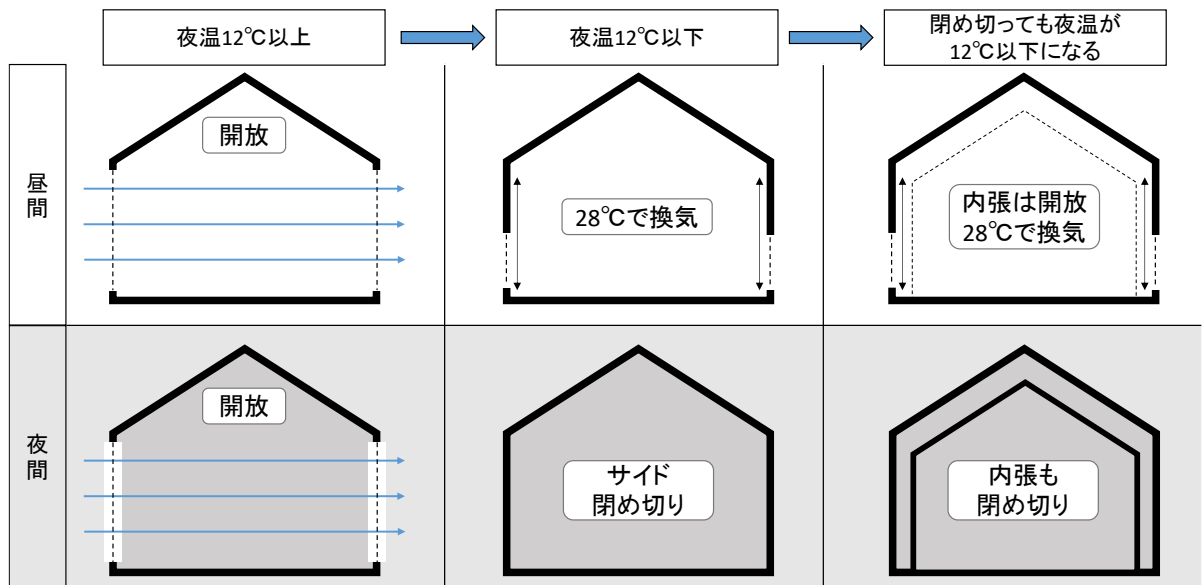


図 25 開花～頂花房収穫のハウス管理

③ 厳寒期の管理(図 26)

夜間は 5°C以上を目標に保温するが、気温の低下や植物体の蒸散によりハウス内湿度が上昇する。8 時～9 時ごろにサイドを開放して 30 分程度の換気を行い、湿度を下げて灰色かび病等の病害を防ぐとともに、光合成に必要な二酸化炭素を取り入れる。ただし急激な環境変化は株にストレスを与え、光合成効率を低下させる原因になることから、開口部は全開にせず、30 分程度かけて換気する。日中は日射を取り入れるため、内張カーテンは開放し、28°Cを目安に換気を行う。

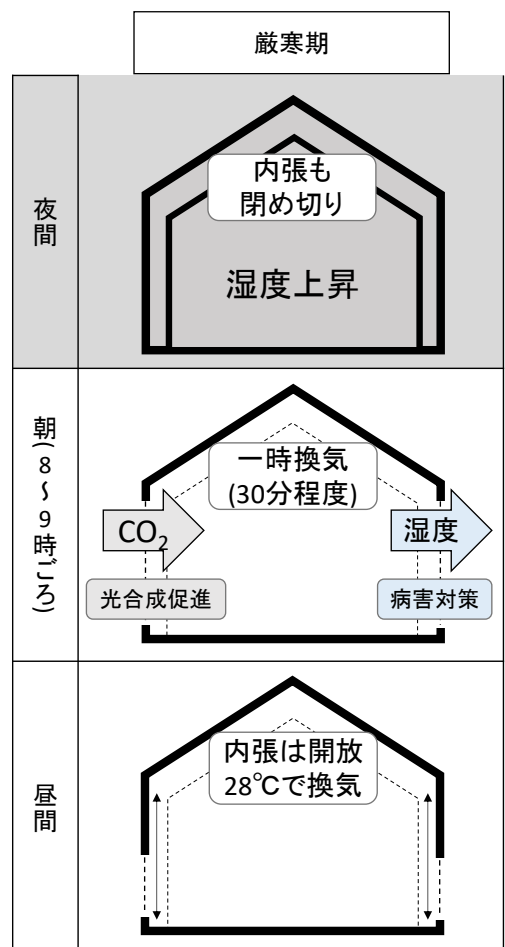


図 26 厳寒期のハウス管理

ハウス内が 5℃以下に低下した日の翌日は、日中に 30℃程度まで高めて草勢の維持を図る。

④ 早春（2月下旬以降）の管理(図 27)

2月下旬ごろ、日差しが強くなるとともにハウス内の気温が上がり始めたら、日中 25℃を越えないように積極的に換気し草勢を抑える管理に切り替える。また、新葉の葉色が薄くなるなど勢いよく生長する兆候が見えたら、ただちに夜間の内張カーテンによる保温も中止する。

保温を続けるなどして換気のタイミングが遅れると草勢が過剰に旺盛になり、果

実の軟化や糖度低下など

の品質低下のほか、果梗が

長くなることで果梗折れ

の原因になる。「みおしず

く」はほかの品種よりも草

勢が強くなりやすいため、

低めの温度管理を徹底する。

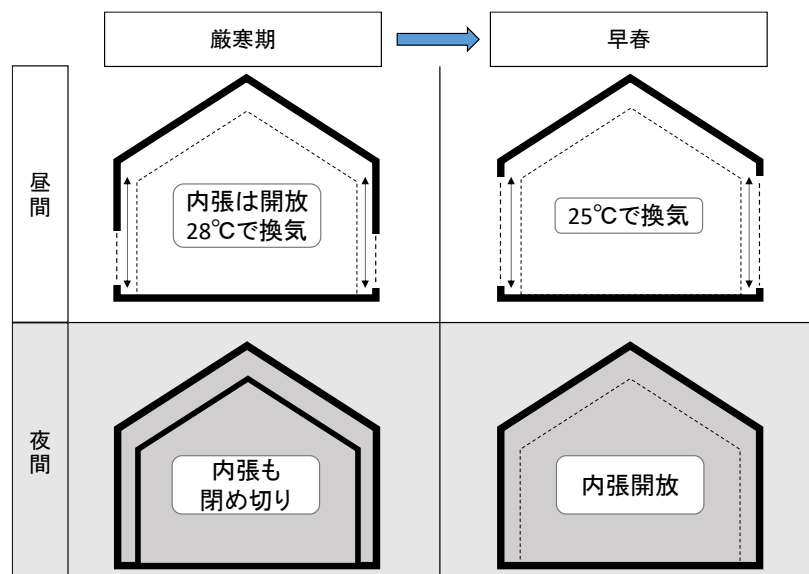


図 27 早春のハウス管理

⑤ 春期以降の管理

基本的に夜間もハウスを開放し、最低気温が 5℃を下回るような場合のみ、夜間にハウスサイドを閉め切る。

(5) E：栽培の終了および培地消毒

① 培地の除塩

栽培終了の 2 週間前から水だけの給液とし培地内の肥料成分を可能な限りイチゴに吸わせる。また、栽培終了後も、肥料成分を洗い流すために水だけの給液を 3 日以上続ける。その後、排液の EC を測定し、原水の EC と同程度になることを確認する。

栽培終了後の株は、病害虫の拡散を防ぐため本圃に放置せず、持ち出してハウス、特に育苗施設から離れた場所で処分する。

② 培地の消毒

栽培終了後、7 月中旬までに、培地を十分に湿らせてから灌水チューブと黒マルチを撤去し、PO フィルム等の透明ビニールでベッドを包み込む。培地が乾燥していると地温を保てず、消毒効果が落ちる。

地温上昇を促すため、遮光資材は全て取り外す。基本的に換気扇やサイドも稼働しないようにするが、ハウス全体が過度に高温になると、機器の故障や栽培システムの破損等につながる可能性があるため、サイドは数十 cm 隙間を開けておく。

4. 果実の収穫

「みおしずく」は、どの季節でも 70～90%着色の範囲内であれば、果実の食味品質は大きく変わらない(図 28)。一方、着色の早さは季節によって異なるため、外観品質も考慮して収穫のタイミングを変える必要がある。

栽培環境によっても成熟に伴う糖酸比の推移は変わる可能性があるため、事前に食味の確認を行うほか、出荷先の JA や市場、実需者の求める品質に合わせて、**消費者の手に届く時が最も良い品質であることを目指して収穫のタイミングを決める。**

特に、市場流通を前提とした場合は棚持ちが長くなるよう、完熟を待たずに収穫するのが望ましい。下記および図 29 を参考に着色程度を確認しながら収穫する。

① 11～12月

着色率 80%以上を厳守し、過熟による品質低下を避けるために着色率 100%にならない程度までに収穫する。

② 1～2月

11～12月と同程度の着色率を目指す。厳寒期で収穫後も着色が進みにくいため、着色率が 80%よりも少し進んだ程度以上で収穫する。

③ 3～4月

気温が高く、収穫後も着色が進みやすい。食味品質を確保できる着色率 70%以上は厳守しながら、流通過程で過熟になることや果実の傷みを避けるため、着色率 90%までに収穫する。

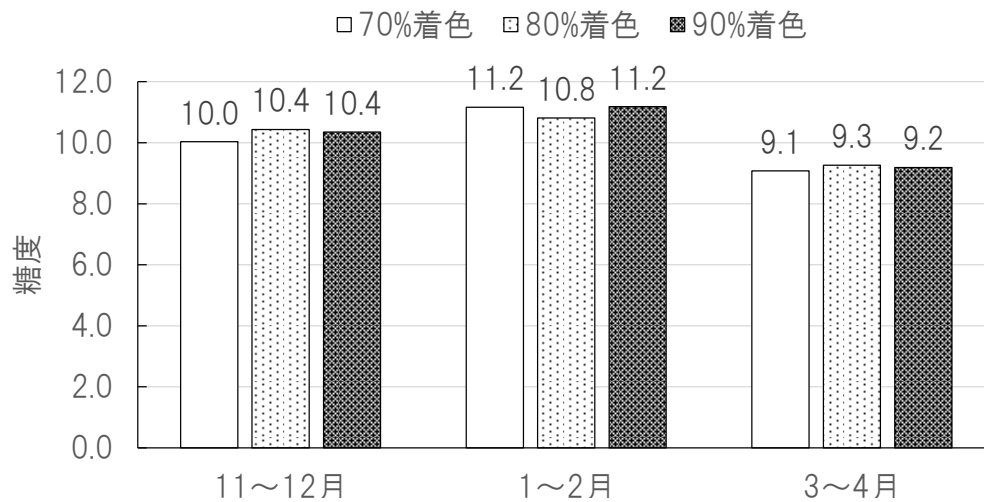
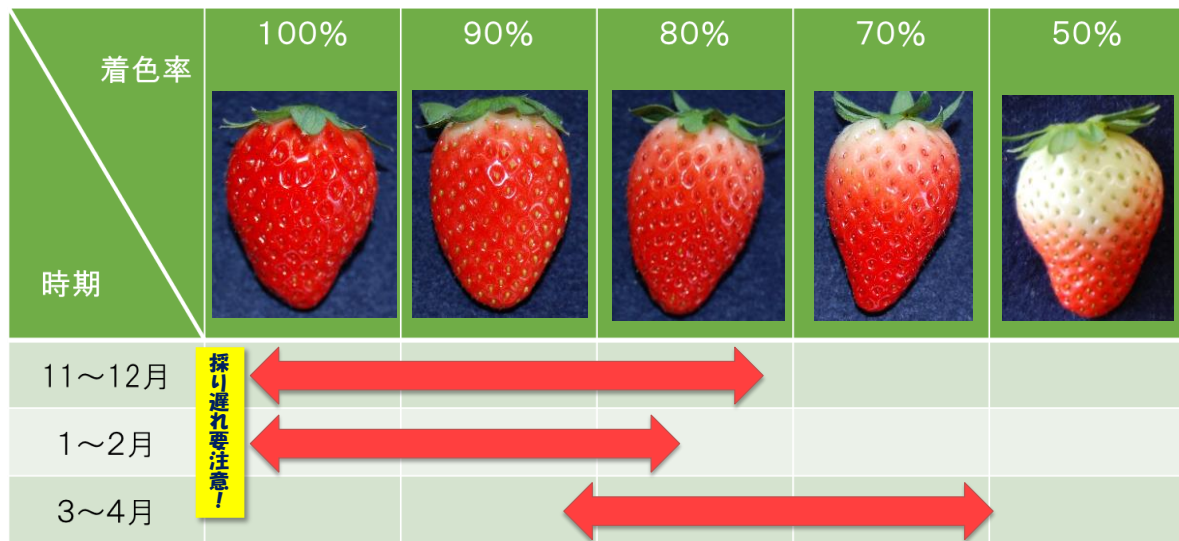


図 28 「みおしずく」の着色程度と糖度の関係（2021 年度）

* 果実の赤道部を非破壊糖度計により測定



※1 収穫時点で測定した糖度・酸度に基づき「みおしずく」の品質特性(糖酸比が概ね16~17程度)が発揮される着色率と、流通上求められる着色率を加味し、**収穫適期範囲の目安を矢印で示した**。なお、成熟に伴う糖酸度の推移は栽培環境によって変わることが想定されるため、**事前に食味の確認を行った上で適期を判断するのが実用上好ましい**。

※2 上に示した収穫目安時期より着色率が進むほど糖酸比が高まり、酸味より甘味をより強く感じやすくなる。着色率100%での完熟収穫を行う場合、**採り遅れによる品質低下が生じないように注意**する。

滋賀県農業技術振興センター 2022年10月

図 29 「みおしずく」の時期ごとの収穫に適した着色率の目安(県内市場流通)

5. 「みおしずく」の栽培にあたる誓約事項

「みおしずく」の育成元株の購入・栽培にあたっては、下記事項を誓約いただく必要があります。これに違反があった場合、本品種の利用に係る許諾を滋賀県が解除することがあります。

誓約事項

- 1 購入種苗は、自己の経営における果実生産またはこれを目的にした増殖のみに使用すること。
- 2 購入種苗およびそれに由来する増殖株は、有償・無償を問わず、第三者に譲渡しないこと。
- 3 自己の農業経営において種苗として用いなかった本品種の種苗は、遅滞なく廃棄すること。
- 4 第三者から本品種の種苗を譲り受けたいまたは譲渡したい旨の申し出があった場合は、遅滞なくその旨を滋賀県に報告すること。
- 5 本品種の種苗を海外に持ち出さないこと。
- 6 本品種の種苗を用いた果実生産（収穫物を生産する行為）を滋賀県内において行うこと。
- 7 年1回以上は種苗の更新を行うこと。

- 8 滋賀県内の市場を通じた販売の取組にできる限り協力すること。
- 9 滋賀県が作成する栽培管理指針を参考に、品種に適した栽培管理を行うこと。
- 10 良品生産に努めること。